

論文

繊維と作業療法(2)

福祉施設における織物活動の実態を通して

難波 久美子

はじめに

高齢者や障害者抜きで現代社会は成り立たないといっ
てよい昨今、そのケアに対する充足度や質の問題が上
がり始めている。急性期対応の療養は、医療機関におい
て救命主義の下で成長を遂げたが、慢性期対応の療養に
なると、医療機関での療法の継続というかたちでむしろ
福祉施設が中心になって実施してゆくという状況ができ
あがりつつあるが、その充実に関しては、大きな可能性
を残している。福祉施設におけるケアは、ひととして
クライアントを位置づけることなしでは、成り立たない
と考える。医療機関では患者の持つ障害に焦点が当てら
れるのに対して、福祉施設では、生活文化の有機体とし
ての個人として、クライアントが位置づけられなければ
ならない。

作業療法に関しては、慢性期対応によってその特質が
より明確に発揮されると考えるため、これからの福祉施
設におけるケアでは重要な位置を持つであろうし、繊維
を用いた作業療法に関しても、その行程の多様性や素材
の特性より、福祉施設でのケアの質の向上や多様化
にとって、効果が期待できるものとする。

また、繊維を用いた作業療法の効果として、身体機能
改善に関する効果と精神的・心理的效果に関するものの
二つが、これまでの調査研究に於いて認識されているこ
とが上げられている。繊維を用いた作業療法の実施現状
を福祉施設に於いて調査研究し、その分析・考察を、福
祉領域・テキスタイルデザイン領域・作業療法領域の三
領域より行うことで、その二つの効果を包括する展開の
方向性を模索することができると考える。

織物活動実施施設調査概要

調査目的

平成7年度におこなった調査研究より、織物活動を作
業療法として実施している施設が岡山県下に14件あるこ
とが把握できた。本年度は、これらの14施設を、高齢者
関連施設・身体障害関連施設・精神障害関連施設の3カ
テゴリーに分け、各1施設を選出し、各カテゴリーの織
物活動実施を調査研究する。織物活動を実施する施設に
おいて、織物活動の位置、展開方式、問題・課題点の明
確化を、各カテゴリーの持つ特性と織物活動との関連性

*NAMBA Kumiko 工芸工業デザイン学科

に主眼をおいて調査研究を進めることで、作業療法とし
ての織物活動の持つ可能性を探ることを目的とする。施
設の選出にあたっては、平成7年度の調査票の回答を基
におこなった。施設の所在については、本研究が地域特
異性よりの考察を行っていないため、選択基準に含まれ
ていない。

調査の方法・期日

次に示すように、平成8年度調査を実施した。
調査方法においては、施設訪問を行い、施設運営関係
者・織物活動指導関係者・織物活動実施者にそれぞれ直
接聞き取り調査を行うと共に、現職作業療法士による
O/T評価を行うことで、織物実施者像の客観化を計った。
<調査対象施設>

高齢者関連施設 A：特別養護老人ホーム
身体障害関連施設 B：重度身体障害者地域作業所
精神障害関連施設 C：精神薄弱者更生施設

<調査方法>

聞き取り調査法及びO/T評価実施

<調査実施日>

平成9年1月～2月

施設定義

特別養護老人ホーム：

65歳以上の高齢者で障害が重く、日常生活で介護を必要
とする人が入所し生活する施設。

重度身体障害者地域作業所：

重度の身体障害者で就職することが困難な人が、入所
(通所)して必要な訓練を行い、仕事をするにより
自活することを目的とした施設。

精神薄弱者更生施設：

18歳以上の精神薄弱者が、社会参加に必要な指導及び訓
練を行うことを目的とした施設。

高齢者関連施設A 視察調査結果

織物活動実施状況

作業療法士による作業療法は機能訓練中心で行われて
おり、activities を中心とする作業療法は、寮母を中心

とする介護職員によって進められている。したがって作業療法の基での activities という意識は低い。織物以外には、園芸・クラフト・お茶のお手前を受ける・大正琴の演奏を聞く・歌唱する等がなされている。織物活動は、導入当初6名の入所者によってなされ、現在は死去・移動等により、その内3名が第二番目のプロジェクトを製作している。activities の目的を、主としてレクリエーション・趣味の一環・精神的安定化を図るものとするが、入所者の余暇や日常生活の目的意識を高めることが、最重要とされている。しかし、activities を行う上において、入所者の受け身の態度・無気力さが問題ともなっており、この点において織物活動は、織物に興味を示した入所者は、作業に積極的に取り組み、彼らの作業を通した集中力・持続力も相当に高いことが報告されている。

活動内容の考察

織物活動を導入した動機は、施設内での文化祭のために展示物を作ることがきっかけとなって、織物活動経験はないものの、織維についての知識の豊富な職員より、入所者への適応が試みられた。その結果、織物作業は入所者の受入が大変良く、その理由として織物が、紐・糸そして結ぶといった、入所者のこれまでの日常生活の中で存在していた身近な素材や行為を用いた作業であること、さらには完成物の認識が入所者にとって容易であるということが挙げられよう。(今回の織物作業実施者は、過去に日本刺繍・籐で籠を編む・手芸をする等の経験を持つ。)

また、施設内で開催された文化祭で、家族・知人等の第三者に自己の織物製作物を見せるということに対しては、他の activities の製作物展示では得られないほどの予想以上の好反応があり、高い精神的効果が得られた。特別養護老人ホームでは、入所者の介護職員への物理的および精神的依存性が高くなる傾向にあり、このことは、新しいこと(人間関係・事項)への受入嫌悪と相まって、入所者と一般社会との距離を大きくしている一因である。しかし、完成品を発表するという織物活動を通して、「第三者による評価」がキーワードとなり、入所者の自己実現・社会参加の実現が計られているように推測される。

指導方法・種類・行程については、織物活動に対する知識不足を職員自らが自覚している事が原因となって、それらの項目における満足度が低いように推測される。行程における入所者の満足度が職員の満足度と差異があるのは、織物作業の織りの段階のみを入所者が行っていることに起因している。さらに言うならば、殆どの行程

*織維と作業療法 (2) 難波 久美子

を職員が行っている事実を、織物活動実施者は、彼ら個人に注がれる個別配慮としてポジティブに受け取っているために、織物作業全体に対する満足度が高くなっているように考察される。得られる効果としては、生活に張りができる・目的意識が芽生える・対応に向上があるなどがあげられ、精神面においての効果が中心となっているが、体調が良くなる・手指機能の改善といった身体面の効果も見られている。こういった精神面及び身体面への好影響は、相乗効果により、片腕の補助として口を用いて横糸同士を結ぶという動作・自由の利かない手指の補助として、目打ちを道具として用いること・縞だけではなく途中で緯糸の色を変えて模様を作り上げる技法の発見へと織物作業を通じて入所者を導く。これら織り作業を遂行する上で生じる問題事項を、各個人独自の力でその解決方法を見つけだしたことは、大きな成果であるといえる。こういった好反応及び結果が、職員そして入所者の内容についての満足度の高さにも影響したと考えられる。

織物活動をするにあたり、一般的に阻害要因の一つおよび阻害要因になるであろうと考えられているのが、織物実施に必要な設備・備品・材料等に関わる費用である。しかし、これはA施設においても該当するものの、A施設の場合当初より、織り機を段ボールで作成したり、横糸に古布・余り布を裂いて作ったりといった、職員のボランティア的協力を中心に低費用の枠の元で実現可能なものを現実化しているという特徴を持つことで経費に関わる阻害要因を解決している。

織物活動実施者についての考察

入所者の織物活動実施への動機は、寮母に勧められてといった受け身のものであり、これは他の activities の選択動機とほぼ等しい。

実施後の感想は以下のとおりであり、いずれも織物活動に対して肯定的なものである。また、織物の内容・行程が簡素なものであることを反映して、それらに対する感想が殆ど皆無であることが特徴となっている。

- ・やったことが目に見えるのでうれしい
- ・たのしい
- ・いろいろなものをつくりたい
- ・色が使えたらもっと楽しい
- ・自分のペースを保持しながら進められるので便利だ

織物活動の実施場所は、テーブルの高さの理由で他の入所者の集まる食堂で行っていることは興味深い。機の

特徴や作業自体、そして各自に与えられている部屋のスペースを考えると、各自の部屋でも可能な作業ではあるが、他の入所者のいる場で織物活動をすることで、得られている効果もあるように推測する。作業を通すことで、入所者達の社会に関わることがより潤滑になっていたり、他者を意識する刺激を得ているようにも思われる。高齢者施設における作業は、何らかのかたちで社会と関与できるものであることが好ましいと考える。

一旦作業に入ると、入所者は長時間（一回につき2時間程度）に渡って織物活動が続けることが寮母より報告されており、自己選択をした活動ではないにも関わらず、活動への適応が大変優れている。織物活動の特長の一つは、忍耐力が要求されながらも、作業をした分だけその成果が目で確認できることであり、A施設の場合も、この特長が織物活動実施者に大きな影響を与えているように思われる。

使用設備・備品についての考察

軽量で小さい段ボールの織り機は、上記のようにロークストで供給可能であるばかりでなく、A施設の対入所者像を考慮すれば、次のような利点も持っている。特別養護老人ホームという場では、片麻痺の障害を持つ入所者が多い。一般的に、健常者が織物活動をする場合、緯糸を挿入したり打ち込んでいくという動作は、両方の手を使って行なわれる。しかし片方の手のみが使用可能な彼らにとっては、テーブル上で自力で容易に段ボール機の方向を変えることで、利き手を使って常に同一方向より緯糸を挿入して織り進めることが、軽量で小さい段ボールの織り機によって可能になるのである。さらに、この小さい段ボールの織り機では、織り面のサイズも必然的に小さくなっていくため、緯糸操作および織り作業自体が片手でしやすくなっていく。また、実践されている織り作業が、横幅程度の長さの緯糸を織る度に供給しつつ長い緯糸を蓄える役割を果たす杆（シャトル）という道具を用いていないことも、片手での織り作業を容易にしている要因となっている。

経糸の交互の上げ下げをする操作については、一般には、足踏みペダル（立式手織機）や手動レバー（卓上手織機）、手でそうこうという装置を吊った棒を持ち上げる（卓上手織機・いざり機・垂直手織機）などという行為によってなされる。しかし、車椅子を使っている多くの特別養護老人ホームの入所者には、足踏み式は不適切であり、片手でも操作できる手動レバー式や持ち上げ式も、ある程度の筋力・体力を要するため、障害を持った高齢者というA施設の入所者条件を考えると適応者が限定されてしまいがちである。A施設においては、これら

選択肢のどれも選ばず、織りの原点に戻った「縫う」という行為を実施しているのが興味深い。実際織る作業をしているのであるが、その行為が縫うと同様の動作であることより（糸の通った針で縫っていくのと同様に、緯糸の最初の端を糸の先端として織る）、織物活動に関わる最少の装置で済むことから、装置に関わる諸問題（購入費用・設置スペース・行程の複雑さ）を回避できているように考察される。用いられていた80cm余りという緯糸の一本の長さは、片手で縫うようにして織る作業に適切となっている。

これらの観点よりA施設で実施されている織物活動を分析してゆくと、特別養護老人ホームにおける織物活動として適切な選択がなされていると考えられる。

織物活動の将来についての考察

調査結果よりも分かるとおり、織物活動のA施設における可能性は大きいと予想される。実施者数の拡大・製作物のレベル向上を通してさらに広がりのある activity となる要素を含んでいるように推測される。

今回は女性有志のみを適応対象として、織物作業導入を実施していた。しかし、それらの入所者（織物作業実施者）の予想以上の好反応をふまえると、その時点において適応対象外とした女性入所者・男性入所者にも適応の可能性を見いだせるのではないかという感触が職員の間で起こっており、織物活動の適応範囲の拡大が期待される。その場合、入所者の障害のレベルばかりではなく、個人的条件（性別・性格・職業歴・いままでの生活環境・趣味等）を考慮した個別導入が必要となってくるであろう。それは、機の種類・織りの種類・素材の種類・デザイン（図案）の種類・完成品の種類等における多様性を反映した個別配慮ということにも等しく、織物活動に対する入所者の受入を改善することにつながる。

A施設における入所者の織物活動は、織り作業に集中しているため、入所者自身の意思の反映の場が少ない。これは活動自体の展開を阻害し不活性化へと導くマイナス要素であり、この点を改善することが、これ以降の織物活動に大きく影響してくると思われる。色・デザイン（図案）・素材・完成品の形態・完成品の発表の場等の面よりからのアプローチの可能性を探り、入所者自身の意思の反映の場を拡大することは、製作物のレベル向上にもつながると考える。

身体障害関連施設B 視察調査結果

織物活動実施状況

この作業所では、織物活動は作業療法という認識に基

づいて行われてはおらず、ひとつの作業（労働）活動種目として捉えられ、展開されている。よってこの作業所では、以下のように原則として、健常者の職場一般での労働と同等もしくは同等に近い状況・条件が設定されている。休日は、土・日曜日と祭日、及び年末年始2週間・お盆前後2週間とされ、それ以外で休む場合は、連絡を要することになっている。また、織物活動時間は、正午から1時間の休憩時間を除く午前10時から午後4時までである。作業手当については、日給制を基本とし、交通費・能率給・利益分配等の付加をもって、月1回作業所員に配当しており、日給額については、年度末に所員全員で決定する。しかし一方では、この作業所の設立の主要目的が、重度身体障害者である作業所員の高校卒業後における社会および社会的活動への参加とするため、織物活動による授産（製作品販売による利益の獲得）は第一目的とはなっておらず、所員の体調や家族のスケジュール等を配慮した個別レベルでの対応を認める環境の設定がされている。

織物活動は、軽印刷・クッキー（自主ブランド）と並んでこの作業所の主要な作業種目であり、その技術指導及び介助は、織物活動実施者の保護者が中心となっている。織物種目を作業所における作業に採用した理由の一つに、3人の重度身体障害児が養護学校時で織物活動を体験したことが基となっている。彼らの織物活動に対する熱意を原点として、保護者が所員と同等に織物活動（経糸の準備・機かけ等）に関する知識・技術の習得をしながら、作業所における織物活動を支え、育成してきたという背景がある。そしてその延長上に現在の織物活動があるため、作業所での製作物を自主ブランドで展示・販売するといったことにも示されるように、織物活動に対する自主選択意識が大変高い。

活動内容の考察

織物活動に関する知識・技術の修得に際して、当時養護学校に勤務し織物知識に豊富な教員や、織物専門家の指導・援助をうけたため、織物活動の内容は、織物の基本組織である平織りを中心とした簡単なものでありながらも、専門的にはその達成度のレベルは本格的なものと言えよう。また、授産目的の商品としての織物製作物に、以下のような工夫を施している。

・品目の工夫

…重度身体障害を持つ織物活動実施者（所員）が作業しやすいサイズであり、そのまま商品サイズとなりうる。
…作業速度（糸の本数・機かけ準備・織り作業等）が比較的早く、織物活動実施者と介助者の負担になりにくい

*繊維と作業療法 (2) 難波 久美子

品目を選択している。

…単純な織り組織が、商品としての短所にならない品目を選択している。

…織上がり後の加工が少なく容易である。

…顧客の体型・性別・年齢・職業等の条件に影響されにくい品目を、作業所での主要製品に選択している。

…個人の複数購入・所持が容易な品目を選択している。

・素材の工夫

…羊毛100%の良質糸を使用し、商品価値を増している。

…織物糸専門問屋よりの購入により、使用材料費の低下にも繋がっている。

・技法の工夫

…作業所で容易に実行できる染色方法を見つけだし、所員の保護者によって手染めされた糸を使用する。

…化学染料を用いながらも、草木染風の色に染めていることで、付加価値を付けている。

・加工の工夫

…織り上がり後に、ミシン等を駆使した加工を施すことにより、多種類の製品を展示・販売することで、商品価格帯を広げ、購買層を拡大している。

過去何度か、作業所主体の作品展示会を岡山市内の一般会場で開催しており、展示品の完売及び製作注文の受注というかたちで成功を収めていることが、織物活動実施者の織物活動に対する自信となって現れている。これは、この作業所が目的に掲げる「所員の社会参加」が、作品展示会を開催することで達成され、さらにその成功により、「所員が一般社会で正構成員であり得ること」の実現が成されたと考えて良いであろう。この場合でもやはり織物活動は、十分に授産目的を果たしながらも、その最大の効果はむしろ、第三者（所員を第一者、保護者を第二者と考えたときの）である一般社会を対象に、自己の製作品が商品として売買されたという事実の獲得である。言い換えれば、生産の喜び、労働の喜び、そして自己が一般社会に認められたという自信の獲得であり、所員に精神面で大きな支えとなっているように考察された。

全般的には、介助者・所員ともに、各項目に関する満足度は高い。作業所開設と同時進行のかたちで、織物技術保持者の協力を得つつ、織物活動に対する技術・知識不足を自ら（介助者・所員とも）トライ&エラーを重ね

ながら習得していったという体験が、それらを通して得た技術・知識に対する信頼度につながるためと推測する。

種類・行程については、介助者の満足度が、所員の満足度よりも低くなっている。これは介助者（この作業所の場合、所員の保護者）が、織物活動を作業所活動・運営面から把握している度合いが、織物活動実施者である所員よりも高いことを反映していると考えられるためであって、必ずしも介助者が種類・行程に関して満足感が低いと言うことではないと理解する。

この作業所では、重度身体障害を持った所員が織物活動を行うにあたって必然として生じる、工程に於ける他者への依存性を、否定的に捉えるのではなく、作業の楽しさを共有できる活動という理解で、作業所での織物活動を実施している。これは、この作業所での織物活動の特徴である。本来、織物作業の実施について、その阻害要因の一つに、行程の複雑さが挙げられている。よって、その行程をいかに容易なものにするかが、織物活動実施の鍵になると考えるのが一般的な取り組み方法である。しかし、この作業所では、所員の持つ障害（重度の身体障害）が完全克服できない性質のものであることゆえに、仮にその織物活動の行程をいかに容易にでき得たとしても、織物活動を健常者と同じように遂行させられる可能性は高いとは言えない。このように織物活動遂行と所員の距離が大きいことで、逆に、その織物活動の作業としてのいわば欠点を逆説的に捉える方向に着目し、織物活動阻害要因を解決している。このように、作業所員の保護者（作業介助者）や技術指導者が、織物活動は共同・分担作業であるという前提に立ってポジティブなアプローチをとっている姿勢が基盤にあるため、前年度調査で上がった織物活動実施に関する阻害要因が、この作業所においてはほとんど阻害要因として認識されていない。

<ケース・スタディ用調査票>より：

- ・適応対象者がいないことが問題・障害となったことがある。…できることをすることにより、解決した。
- ・製作に時間が掛かることが問題・障害となったことがない。…各自のペースを尊重し、ノルマ等がない。
- ・セッティングに時間が掛かることが問題・障害となったことがない。…保護者等の介助者が楽しんで行っている。
- ・作業として効率が悪いことが問題・障害となったことがない。…初めから納得している。

・織物活動実施者の技術修得が難しいことが問題・障害となったことがない。…やれば何らかの進歩がある。

このように、障害者を取り巻く人々が、織物活動に対して障害者と同様の興味関心を持ちながら行程作業の分配が行われていることが、この作業所での織物活動の実施を成功させているように考察すると共に、手間暇が掛かる等の織物活動の性質を理解し、それらを活動の特徴として肯定的立場で受入れていることも注目に値する。

織物活動実施者についての考察

この作業所の織物活動実施者は、作業所設立メンバーである彼らが、養護学校（高等部）の美術の時間に教員より織物の導入・指導があった際に、興味を持ちはじめたことより、すでに動機づけが成されており、織物活動に対して自己選択意識が大変高いのが特徴である。作業所で織物活動を行なわれるようになってから通所し織物活動を始めた所員に関しても、織物活動を受け入れる前提が自己選択されている。このため、実施者の織物活動に対する適応は非常に良い。

経糸の準備等の行程作業そのものにおいては、介助者に依存しているものの、そのデザイン・企画等（サイズ・色等）においては織物活動実施者の主体性が重視され決定されていくため、全行程をひとりで行えないことに対する不満感是比较的低いと推測される。織物活動に関する活動実施者の感想は、以下である。

- ・やったことが目に見えるのでうれしい
- ・みんなで相談しながら作業を進められるので楽しい
- ・体調等の自分のペースを保持できるので便利
- ・自己製作品が商品として売れることで、社会に認められてうれしい
- ・経済的に他の作業よりも利潤が高いのがよい

織物自体のレベルは、時折緯糸をとばす等の行為のミスがあるものの、全体として遜色が無い場合が多い。この作業所での織物活動は、「織物行為として通例とされていること・常識とされていること」に対する「間違い」の存在を否定している。それによって、作業所員が自己萎縮することなく、楽しみながら織物活動を行うことで、織物活動から創造の喜びを引き出しているのが特徴である。

一方、製作品の品質やレベルの向上においても、織物活動実施者自身が、商品製作に携わっているという意識を持つことによって、前述のような織り行程中の行為のミスを回復したり、織り上がり後の加工時で解決するな

どの手段等によるなど、リラックスした空気の中での自主的品質管理が施されている。

O/Tテストを実施した2所員に関しては、彼らの現在の織物活動への満足度は各項目について非常に高く、製作工程の観察からも、彼らの織物活動に対する適応度は優れている。しかしそれだけに、共に20歳台という年齢を考えると、彼らの中に、これからの知識・技術の獲得においての十分な余地を見いださざるをえない。できる作業の完成度をさらに高めることやできる作業の幅を広げることを通じて、より高度な目標の提示・達成が図られ、作業内容の質の向上に結びつくと考察する。

使用設備・備品についての考察

作業所設立当初は、一般住宅賃貸アパートを作業所として使用していたため、身体障害を持ちながらの織物活動に関しては、機を設置した部屋の中および段差のある部屋間の車椅子での移動等において、困難を伴うことが多かった。しかし、これらの問題も、ひとつのスペースで段差のない織物作業場を設けてある現在の専用建物に転居してから解決された。また、作業所等の障害者受入れが初めての地域での設立であったため、地元地域との関係が当初懸念されていたが、時間の経過や作業所の実績を通してのコミュニケーションによって、現在では潤滑なものになっている。

この作業所では、現在、6台の立式機・3台の卓上機を保有している。主な織物活動実施者が車椅子を使っているので、車椅子のスペース・踏み木式でないことの2点が、使用織り機の必然チェック項目となり、一般に市販されている卓上手織機を木製の台の上に置く工夫により、上記2項目を充足させている。これにより、各個人に合わせた車椅子のスペースを作り出すことができると同時に、手動でレバーを上下させて織るという卓上機の機能により、足を使う必要が全くなく、車椅子使用者には最適なものになっている。ちなみに、卓上手織機は足の使用が不可能な人を特定対象とはしておらず、市販手織機の中では、作業・収納スペースが広くなくてもよい・購入価格が比較的安い・全工程が卓上で行えるため作業がやりやすい等の長所から、健常者を中心にかなりの利用がある。

レバーを手動で上げ下げすることでさうこうの開閉を行い、緯糸の巻かれた杼(シャトル)を通してゆく作業は、足踏みペダル(立式手織機)を使用する以上に、肩から腕にかけての筋力と体力全般を必要とし、その強化においても高い効果が期待できるという利点を持っている。しかし、この作業所においての織物活動の主目的は

*織維と作業療法(2) 難波 久美子

機能改善訓練ではない。単なる機能改善訓練のみであれば、卓上手織機を卓上で用いてもよいし、レバー式でないより容易にさうこうの上げ下げができる機を利用することも可能であるのだが、一番大切なことは、織物活動実施者が使いたいタイプのもを選択した上で、一般健常者による作業に近い状態で、(訓練ではなく、自己選択した)作業を行うということであろう。事実、改造手織機を使って織物活動をする彼らの姿は、一見健常者のものとほとんど変わらなかった。一般社会での社会参加としての労働の機会を得ることを主目的として掲げるこの作業所に置いて、作業所員が「一般の状態に近い」ことが大切なのであり、それにより得られている心理的効果は身体的効果を生むほどまで大きいと考察する。

織物活動の将来についての考察

B施設における織物活動は、所員及び保護者の熱意を基盤としてなされているだけに、努力の積み重ねの結果として、各項目に関する満足度も高くなってきており、他施設の理想にも近い大変良いかたちで実地が行われている。このことは逆に、他の物理的条件が整ったとしても、真なる織物活動実施の成功は、常に実施者の「熱意」なしでは獲得しえないということを示し、作業に対する動機付けの重要性を表している。

しかし現状に対する満足度が高い一方で、20代中心という作業所員達の年齢ゆえに、作業所および作業所員個人の将来像の不鮮明さが、所員・保護者のなかで今後に対する不安となっているように感じられ、これは作業所および織物活動のこれからの展開計画の必要性を表しているとも読みとれる。

介助無しでの一般生活及び織物活動が不可能である彼らにとって、何らかの方法で介助の程度を少しでも低くすることは、将来のオプションを広げることであり、「自分のことが自分でできる」ことを最大理想と掲げるのは自然のことである。また、一般的に、織物活動の効果の一つには、全行程を自分で遂行することによって得られる達成感・満足感がある。これらの点で考えると、織物活動は、介助の関わる程度が高く、最適作業種目とはならない。しかし、この作業所では、織物活動をそのような個人行為として捉えるのではなく、グループによる集団行為として実践しているのが、大変興味深い。このアプローチは、障害者における織物活動、さらには、作業療法一般においても、効果的であるように推測される。作業療法に於いての作業の役割の一つに、作業を通しての社会参加がある。一般的に織物活動実施のハンディとされてきた行程の種類・難易度における多様性は、

この点において一変し、工程の分業化に基づいた集団作業が可能となる長所として読み換えることができるのである。この作業所での織物活動も、その特性を十分に活用して成功している例とあってよいであろう。

その集団作業の場において、織物専門知識・技術の集積が、彼らを「介助される側」から、知的資源を他と共有する「適応作業の分担者」へと変換させる鍵を握っているように思われる。

重度身体障害を持ちながらの織物活動は、設備・備品およびやり方の工夫をはじめ、一つの行程・動作にしても健常者の思いしれない努力の積み重ねの結果である。しかしそのようにして到達している現在のB作業所の織物製作品が、織物製作品一般として見た場合に、「重度身体障害を持つ人々によって作られた」という注釈無しでも立派に通用できるレベルのものであるだけに、将来、さらにそのモノとしての質の向上の可能性が問われてくるであろうし、またそれに対しての新たな努力を重ねる力を蓄えつつあるように感じられた。それが追求されたとき初めて、B作業所の織物製作品は、独自のブランドとして独り立ちしはじめるように思われる。

また、他の健常者に対して開かれている織物分野に関する専門知識・技術の獲得の機会が、当然彼らにも開かれてよいはずである。この作業所での織物活動の実施者は、デザイン・かたち・プロポーション・色彩・素材・織物技法・染織歴史などに代表されるテキスタイルデザイン専門領域からの観点を、より広くそしてより深く学ぶ機会を得ることによって、織物活動と個人の新たな展開を育てる可能性を持っているように思われた。それは織物製作品のレベルの向上に繋げることのできる要素でもあり、また織物活動を通しての個人の人間性を育てる可能性とも考えられる。

精神障害関連施設C 視察調査結果

織物活動実施状況

この施設における織物活動は、手芸グループの中の活動として行われており、他の手芸活動としては、クロスステッチ刺繍・プラスチック製の網にアクリル糸を括った絵柄マット作り・かぎ針編み・リボンフラワー作り等があり、織物活動と平行して同一の部屋でおこなわれている。テーブル単位で別個の作業種目がおこなわれており、複数の作業種目に従事する入所者はいない。入所者の配属する作業グループは、施設職員・保護者・入所者によって、毎年年度始めに個人対応の評価・検討が行われ、決定される。平成8年度は、約10人の入所者が手芸グループに配属され、平均約2名の作業指導員の下で

各々の作業が同時進行されている。そのため、作業指導員は、他の手芸活動を行っている入所者への指導や、別行程の織物活動の指導・下準備にも同時に関わらねばならず、織物活動実施者の障害度（重度）とあいまって、作業指導員の負担度は大きくなってきている。

この施設における作業活動は、作業療法という認識に基づいて実施されていないため、委託医・看護婦はスタッフ内にいるものの、作業療法士・および理学療法士はおらず、またその必要性もなしとされている。また、入所施設であるため、24時間体制で精神障害を持つ入所者の生活管理が行われ、起床時間から就寝時間までのスケジュールが決められており、作業訓練もその生活指導の一環として行われている。一回における作業時間に関しては、約2時間～3時間という大きな時間のくくりで入所者のスケジュールに組み込まれており、現状では、週8時間程度の織物活動が行われている。このことは、施設での入所者の生活にとって、作業活動、この場合織物活動、の占める役割や意義が大きいことを示していると考えられる。

この施設における織物活動の導入は、作業指導員の一人が染織専門知識を持っていたことに起因する。その指導員の下で、他の施設で行われている織物活動とは異なった特色を持たせる目的で、羊の原毛を染色し紡いだものを材料とした織物活動を始めた。しかし、現在、その指導員が退職してしまったため、染織専門知識が豊富とはいえない他の生活指導員により織物活動の作業指導が行われており、織物活動の作業としての入所者への適応および展開の困難さに直面している。

原毛を他の公的機関より譲り受けることや、それを草木染をすること等で、織物活動に関する材料費の低下が成されていると同時に、他の染織製品との競合に置いて、手作り・自然志向という付加価値を付けている。また、時間がかかりながらも織り上がった製作品は、素材のユニークさの良く出た魅力有るものとなっはいるが、その販売による授産に関しては高いとは言えない。品目や加工、対象市場に焦点を置いた商品企画における展開が望まれている。

活動内容の考察

C施設では、織り行程のみならず使用する糸作りから本格的に行っており、以下の作業項目を実施している。

・原毛の洗毛作業…

他の公共施設より譲り受けた羊の原毛は、染色工程前

に除去しなければならない原毛中の油分・藁や草・塵・排泄物などを取り除く目的で、洗剤で洗う必要がある。作業場所は、施設内の入所者用風呂場で行っているため、作業の前準備および後始末に時間が掛かっているように思われた。作業自体は、比較的単純なものであるため、入所者の実施が比較的容易である。

・原毛の解毛作業…

洗毛された原毛を解きほぐす行程を行い、次の手紡ぎ作業の下準備である。一對の櫛状の道具を手で操作する方法もあるが、この施設では、より大量に原毛が処理できるドラムカーダーという器具を用いている。この器具は、テーブル上で使用するのが一般的であるが、ここでは、床に置くことにより、体全身を用いて作業を行うことができるようになり、入所者の作業への適応がより容易になっている。しかし、ドラムカーダーに原毛を挿入する以前の手ほぐしの作業を行っていないことや、洗毛時で原毛がかなりフェルト化してしまっていることの為に、本来以上に労力のいる作業になってきているように考察された。

・紡毛機による手紡ぎ作業…

輸入紡毛機を用いての手紡ぎ作業であるため、踏み板を踏む足の調子と、カードのかかった原毛を紡毛機のつむに流してゆく手指の調子とが、うまく協調されなければならない。一度体得するとさほど難しいものではないにしても、この作業は、一般健常者でも初心者として一定の訓練が必要なものであるため、中および重度の精神障害者にとっても、かなり長時間にわたる訓練が必要となってくると予測される。このためか、現在は手紡ぎ作業の殆どを作業指導員の手によって為されている。

・原毛の草木染による染色作業…

近くの野山に入所者と共に出かけ、採集した草木を染色材料として用いる。戸外におけるレクリエーションとも兼用でき、平常とは異なった場所（室外）での作業により作業活動に変化を持たせ、入所者が楽しみながらできる作業となっているのが好ましく思われた。染色行程においても、作業指導員の指導の下で、いろいろなレベルにおいて入所者の参加が可能である。

・経糸かけ作業…

正確性と数字を理解する能力が要求される作業のため、重度の障害レベルを持つ入所者による実施は困難を伴うと考察される。また、確実な作業は、次の行程である織物作業を行いやすくさせ、その効率や作業としての

*繊維と作業療法 (2) 難波 久美子

効果において好影響を与える。よって、あえて困難に直面しながら入所者の主体的作業実施を促すよりも、入所者のできることを選択して実施させていきつつ、作業指導員やボランティア等の非入所者が主なる経糸かけ作業を行う方が、この施設の状況に於いてはより良い効果が得られるのではないかと推測される。木枠機の場合、釘に糸をかけていくことにより経糸かけがおこなわれ、この作業が実行可能な入所者もいる。立式機織り機への経糸かけは、それに比べると非常に複雑で、有る程度の技術も必要となってくるため、やはり、この行程における入所者の直接関与は、プラス効果よりマイナス効果の方が大きくなってしまっている。

・織り作業…

この施設では、織り込む緯糸を手紡ぎしたり草木染を施すことによって、織物製作品を特徴づけようとしているため、その緯糸を充分表面に表すような緯貫き（ウェフト・フェイス—緯糸が主として表にみえる）の技法を用いていることは、適切な技法選択ができていているように思われる。ただ、おなじ木枠機や糸・織技法を使いながらも、障害レベルの個人差に着目しながら、デバイス（工夫された道具類）や手法を選択導入することにより、織り作業の展開に多様性を持たせることが可能なようにも考察された。

織物活動実施に関しては、大多数が同一の素材・道具（木枠機・手紡ぎ糸・ものさしの杵）で、同一の作業（経糸をすくいながら緯糸を挿入し、打ち込む）を行っている場合、実施者の障害程度によって個別注意は必要なものの、作業指導員に懸かる負担度はとりわけ大きい訳ではない。入所者が各自のペースで行えるという、織物活動の長所が生かされているように思われた。

<ケース・スタディ用調査票>より：

・適応対象者がいないことが問題・障害となったことが：ある。…受入の良い行程を見つけることで、解決した。

・製作に時間が掛かることが問題・障害となったことが：ない。…各自のペースを尊重し、ノルマ等制約が少ない。

・セッティングに時間が掛かることが問題・障害となったことが：ある。…作業指導員にかかる負担が多く、解決していない。

・作業として効率が悪いことが問題・障害となったことが：ない。…織物活動に効率を要求していない。

・織物活動実施者の技術修得が難しいことが問題・障害となったことが：ある。…繰り返しの訓練により、ある程度の修得が可能である。別行程の適応を考える。

織物活動実施者についての考察

作業訓練の主目的は授産ではないが、入所者の経済援護の目的および施設運営レベルの向上の必要性より、授産率の高い作業種目が重視されることが多い。よって、それらの種目に、作業能率の高い、軽・中度の精神障害を持つ入所者が集中する傾向が見られ、現在の授産率が高いとはいえない織物作業には、中および重度の精神障害者が集まる現状が発生している。そのため、紡毛機を使って原毛を糸に紡いでゆく等の織物活動作業が可能に入所者は大変少なく、また殆どの織物活動準備作業が作業指導員の手によって成される現状を生み出しており、作業指導員の介入度をいかに下げた織物活動が実施できるかが今後の課題となっている。

織物活動実施に関してO/T評価をおこなった3人について考えると、3人が各々に楽しんで織物に取り組んでいたように思われるが、織物種目が完全なる自主選択でないため、入所者にとって作業が織物活動である必要性が高いとは言えないであろう。できることを遂行することから生まれる喜びや楽しみは、織物活動を通じても得ることができると言い換えるほうが、適切なのかもしれない。

手芸班に配属される入所者は、主として手先を使用することが得意であったり、そうすることに喜びを見いだす特性を持っている傾向にある。手芸班の作業種目の中で、織物活動と、刺繍・編み物・マット編みなどの他の手芸活動の違いに焦点を置いて織物活動の特性を考察すると、以下のようなものである。

・作業中の指導員介助の割合については、織物活動の方が、高い。…介助の割合が高いことは、入所者にとっては、作業に対する適応度の問題としてマイナス認識されているというよりも、個人に対する配慮としてプラス認識されている傾向が強いと考えられる。また織物活動実施者は、他の手芸種目実施者よりも、個人への配慮をより直接的に望んでいるようにも理解できる。そのため、全行程をひとりで行えないことに対する不満感度は低いと推測される。

・色の使用は、他の手芸作業の方が鮮やかである。…織物活動の場合、草木染の糸のため、色調が落ちついたものになっている。しかし、色の嗜好と選択種目との関連性は今回調査をおこなっていないので、織物活動実施者

が草木染めの色を好んでいるからとは断言できない。

・指先や肌に触れる感触については、織物活動の方が、より柔らかい。…入所者は、織り作業の結果を視覚と同時に触覚で確認している。

・完成品の出来映えが、技法の簡素さや技術の優劣に影響されにくい。…使用材料が手作りのユニークさを持つため、その特性が十分に完成品の魅力となり得ている。

・色・糸の種類・柄等の選択において、他の手芸活動と比較して、入所者の意向の反映の場がほとんどない。…このことは、入所者の障害のレベルや傾向と深い関連性を持ってくるのであるが、これらのオプションを広げること、入所者の作業及び各工程への適応においての発展に繋がる可能性を持っていると推測される。

使用設備・備品についての考察

C施設で使用されているドラムカーダー・紡毛機・立式手織機などの備品は本格的なものであるが、障害者用に設計工夫されたものではないので、その使用においての工夫をおこなっている。しかし、現在作業指導をおこなっている職員の、織物活動に関する専門知識が豊富で有るとは言えないため、その応用・展開においてこれからの改善の余地が大きく残っており、織物専門家の関与による知識・技法の共有により、織物活動の活性化が計られると考えられる。

と同時に、それら本格的な備品のために、作業活動がその範疇内のものに拘束される傾向も潜んでいるため、それが織物活動の展開・応用においての足かせにならないように留意する必要がある。

また、現在使っている紡毛機が、本来細番手の糸を紡ぐように設計されている為、入所者の手紡ぎ作業がより困難になっているよう考察された。現在の織物製作品が、いきいきとした個性のある手紡ぎ糸の表情を現存したものになっているだけに、コントロールが少なくても紡ぐことができる太番手の糸づくりを目指す方が、より適切であると思われる。その場合、太番手の糸づくりを得意とする紡毛機の使用が許されるならば、より作業効率の上昇が期待できよう。

織物活動の将来についての考察

C施設における織物活動の特徴は、織る作業およびその準備作業だけでなく、羊毛を原毛の段階から素材として取り扱い、手紡ぎや草木染を行なっていることにある。素材・行程の選択肢に多様性をもつ染織活動自体の特色を良く生かした取り組み方針であるといえる。そして、

行程の数やその実施における難易度の多様性が豊富になるほど、作業としてのいろいろな適応が可能になる。この点に於いてC施設の行っている染織活動は、織物作業だけではないためさらに適応の対象者が広がってきている。

しかしこの多様性の為に、ややもすると実施者への効果に対する配慮が、おざなりになってしまう傾向に陥る場合もあり、各作業の遂行を目的とするよりも安定化（作業としての完成度・実施者への効果）を考慮してゆく必要がある。その場合、各行程の簡素化を計りながら作業としての安定化を獲得しつつも、選択素材の持つ特長を全面に押し出すことによってより効果的な織物活動を展開できるのではないかと考える。また、作業が多項目・多行程にわたるため、作業指導員の持つ専門知識で、それらを網羅することが困難となっており、テキスタイルデザイン専門領域よりのアプローチが、各工程における展開の豊富さや的確な指導方法にとって有効であると考察される。

作業療法に於いては、療法を行う必然性と作業自体に対する動機付けが軸となってくる。C施設の場合、織物活動を作業療法として位置づけてはいないが、その掲げる目的が、忍耐力を養う等の入所者の精神的ニーズを充足させるものであり、施設として療法を行う必然性を認識し実行しているように考察された。C施設における現在の織物活動は、試験的な試みという範疇内であるが、これ以後の施設内での作業としての定着を求める場合、活動実施者に対する療法としての効果や作業としての授産効果の増大を明示してゆくことが、織物活動に対する施設側の動機付けに繋がると考えられる。一方、入所者側にとっては、彼らの持つ障害（精神障害）を考慮すると、療法を行う必然性を彼らに求めるといよりは、作業自体に対する入所者の動機付けを強化してゆくことで、織物活動の療法としての活性化に効果があると考えられる。これは、完成品を自己確認できるような品目の開発やその対象市場開発等を通して可能になるのではないかと考察され、授産効果の上昇とも深い関連性を持つてくように予測される。

調査結果の要約

織物活動を実施している各施設では、織物活動の特性を理解・是認した上で、障害要因を克服するというよりも長所を生かす方向で活動を行っていることが判明した。また、織物活動を、健常者が一般に考えるような個人的活動して捉えるのではなく、むしろ共同・分担の可能な集団的活動と位置づけることによって、織物活動実

*織維と作業療法(2) 難波 久美子

施を可能なものに行っていることは、今後の展開の指針となるであろう。高齢者関連施設に於いては、織物活動に対する興味づけ・興味の持続のための活動展開方法が、身体障害者関連施設に於いては、染織専門知識を学ぶことによる織物製作品のレベルの向上が、精神障害者関連施設に於いては、行程作業の安定化と授産の増大が、今後取り組んでいかなければならない課題として上げられよう。

同時に、現場では、織物活動および作業療法に関する指導者・専門家がいいため、これからの展開方針・方法が不明瞭なものとなっている。上記の課題を解決する為だけにとどまらず、作業療法としての織物活動をさらに発展させていくためにも、各専門家の持つ知識・経験の福祉施設への導入が必要とされている。

おわりに

各事例は、各々の属するカテゴリー（障害別・施設種別）の特色が予想以上に色濃く反映し、作業療法における織物活動に対する視点・求める効果・各施設での位置づけ等に於いて、各々特異性を持っていることが判明した。つまり、このような織物活動と障害別・施設種別の強い関連性を基礎要素として、これ以後の調査研究を進めていく必要があることを示したものである。

また、事例調査研究によって、各施設では、織物活動が作業療法の一活動として殆ど認識されていないことに直面した。これは、各施設に於いて、作業療法の目的及びその認識が、機能回復としてのみ捉えられていることを示唆するものであり、さらには、織物活動がその機能回復に於いて効果的であるという認識に薄いことを示している。よって、実際の織物活動状況も、余暇・人生の生き甲斐・生活の目的意識を高める等の精神的ニーズを中心に展開されており、身体的ニーズの充足（身体機能の回復）に関する考慮は高いとは言えない。このことは、これからの作業療法の目的・効果が、精神的ニーズをより充足させるものへと要求されるであろう傾向を示していると同時に、その展開に於いて、身体的ニーズからの織物活動への支援、特に作業療法士の持つ機能回復に関する知識・ノウハウの共有により、作業療法としての織物活動がより有意義なものになると考察された。